

令和 5 年 6 月 6 日現在

機関番号：32612

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K20240

研究課題名（和文）授業実践において教師が子どもの「声」を聴くことの研究

研究課題名（英文）A study of teachers listening to children's "voices" in classroom practice

研究代表者

植松 千喜（Uematsu, Kazuki）

慶應義塾大学・教職課程センター（三田）・助教

研究者番号：00908676

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究が研究期間に明らかにしたことは、次の2点である。第1に、「生徒の声を聴く」という素朴に日常的にも使われる考え方が、教育学研究や教育実践において広い射程をもつ多義的なものであることを明らかにした。第2に、教師が子どもにとっての異質な他者であることが子どもの声を聴きやすくすることや、反対に教師と子どもの文化的背景が重なることが子どもの声を聴くことを難しくすることが起こりうることを、教育実践の記録を事例として明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子どもの文化的なアイデンティティや実存を尊重する教育実践のあり方は、近年日本でも理解が広まってきており、本研究がテーマとした子どもの「声」を聴くことも、なかばありふれたフレーズとなっている。しかしながら本研究は、教師が子どもの「声」を聴くうえではさまざまな困難に直面することと、同時に生徒の声を聴くことで実現した学びをアメリカの事例から明らかにし、教師が子どもの声を聴くことが決して容易な行為ではなく、複雑な実践であることを改めて示した。

研究成果の概要（英文）：What this study has revealed during the research period are the followings: First, it became clear that the idea of "listening to students' voices," which is also used in daily lives, is a multifaceted one with a wide range of range in pedagogical research and educational practice. Second, it became clear that the teacher's heterogeneous otherness to the child can make it easier to listen to the child's voice, and conversely, the overlapping cultural backgrounds of the teacher and the child can make it difficult to listen to the child's voice, using the descriptions of educational practice as examples.

研究分野：教育学

キーワード：生徒の声 批判的教育学 クリティカル・ペダゴジー 多文化教育

1. 研究開始当初の背景

近年日本の教育をめぐって、その子どもの文化的なアイデンティティや実存を尊重する教育実践のあり方が模索されている。子どもの学ぶ権利を保障するという場合には、その子どもならではの学びも重視されなくてはならない。

海外の教育学研究では、子どもの存在を承認し、権利(rights)を保障すること、子どもを尊重する(respect)こと、子どもの意見や意思に耳を傾ける(listening)ことなどを含意した表象として、「生徒の声(student/pupil voice)」という概念が存在する。この概念の射程には言うまでもなく、子どものアイデンティティや実存的側面が含まれている。子どもの声を学校においてどういった場面で活かすかには様々な方法がありうるが、海外での「生徒の声」の先行研究では主に、学校経営とその改善という文脈でその多くがなされてきた。

これに対して申請者は、日々の授業実践の中で、子どもの実存とつながるような学びが創られる過程に関心を持っている。そして、授業において子どもの声を捉え、そこから学びを創る教師の行為とは、実際にはどのようなものなのか、という問いを持つに至った。

2. 研究の目的

1. 背景をふまえて、本研究は研究期間中に、以下の2点を行うことを目的とした。

(1) 国際的な「生徒の声」の研究動向を整理し、国内の既存の取り組みとの接点や、今後の研究の展望を示すこと

(2) 米国の多文化教育の実践記録や教師の語りに着目するなかで、教師が「生徒の声」を聴くことがどういう行為なのか、その際に伴う困難にはどのようなものがあるのかを明らかにすること

3. 研究の方法

2.の(1)と(2)の研究課題に対応する形で、それぞれ主に文献調査を行い、整理と分析を行った。論文執筆にあたっては、有志の研究会による助言も得た。

4. 研究成果

研究の主な成果を上記2点の研究課題に対応する形で記す。

(1) 国際的な「生徒の声」研究の動向

(1)の研究課題について、当初は上記2.に示した通り、あくまで国際的な「生徒の声」研究の動向を広く全般的にレビューすることを目的としていた。しかしながら、実際に「生徒の声」研究の全容について調査を進めていくと、研究史上の経緯から、「生徒の声」研究と直接銘打たれている教育経営の文脈に位置づく研究以外にも、「生徒の声」研究の射程を広げることが可能であることを認識した。加えて、1.で示した研究代表者の問いのように、授業を始めとする教師によるペダゴジーにおいて「生徒の声」を捉えようとする研究が、そうしたメインストリームの教育経営の文脈の研究と比較した際に、周縁的な位置にとどめられていることも明らかになった。研究代表者の本研究課題およびこれまでの研究の成果が、こうしたペダゴジーの文脈にあることに鑑みた場合、単に全般的にレビューをすることにとどまらず、この文脈の研究の意義を押し出す必要があると考えた。

そこで、当初の研究予定の通り、「生徒の声」研究の射程を広く捉える視点は持ちつつも、本研究課題の文脈の位置づけを強調するために、ペダゴジーにおける「生徒の声」研究という枠組みの独自性と重要性を示す論文を執筆した。当該論文は『明治大学教職課程年報』に2021年度末に掲載された。

当該論文では、単に「生徒の声」と銘打たれている研究を整理するのみならず、「生徒の声」という概念が想定しうるアプローチを可能な限り広く捉えて類型化することを試みた。その結果、おおまかに3つの系譜に分類した。

まず、(a)若者と大人のパートナーシップを築くことを目指す研究群は、単に生徒の経験や視点を「声」として聴くことにとどまらず、実践として変革を起こすことが重視されている。そのため、アクション・リサーチの形を取ることが珍しくなく、研究と実践の距離が近いことに特徴があり、この分野の研究者たちはアカデミシャンであると同時に、実践者の側面も持つとされる。今日において「生徒の声」研究と銘打たれた研究は、この系譜を指すことが一般的である。

もっとも、この系譜の研究はしばしば研究が実践と一体化しているため、担い手が必ずしも研究者に限定されない。初等中等教育や高等教育の現場の教師や生徒・学生が含まれ、実際に生徒が筆頭/共著者として名を連ねることもあるほか、社会教育に分類される学校教育外の文化施設（博物館、動物園、美術館、図書館）にも「生徒の声」を応用したアクション・リサーチ（オーディエンス・リサーチ）が展開されている。加えて、行政が主体となることで、イギリスのオフステッドやニュージーランド教育省が主導する生徒によるアセスメントなどのように、行政が主体となって「生徒の声」を制度に組み込む例も存在し、すでに国境を超えた多様な実践の文脈に開かれている。

また、実践主体と文脈が多様であるということは、必ずしも同じ思想や哲学を前提として共有しているとは限らないということでもある。「生徒の声」の取り組みは、その沿革からいえば、本来は新自由主義に抗する性格を持つはずのものであるが、グラウンドウォーター＝スミスらが述べるように、「生徒の声」の取り組みの中には必ずしも市民性や民主主義を重んじていないものや、むしろ新自由主義の立場から学校教育の市場化を目論み、民主主義の基盤を掘り崩そうとするものすら散見される。

加えて別の問題として、教師と生徒が協働するアクション・リサーチのほとんどは、正課の授業外に位置づけられているほか、参加も任意とされている。生徒が参加しないという拒否権を尊重することは重要である一方、例えばマイノリティの「声なき声」を聴き、包摂を目指すという観点からは限界も有すると思われる。

次に、(b)学校での多様な生徒の経験や視点に着目する「生徒の声」研究群は、とりわけ学校教育において周縁化された生徒のアイデンティティに着目し、その生徒のもつ文化と学校文化の摩擦がどのような形で生徒にとっての困難となるのかを明らかにする研究が多く、学校教育の構造に対して批判的な立場に立つものが少なくない。(b)の研究の系譜は、素朴に「声」という語からイメージされるものとかなり重なることもあって、もっとも歴史が古い。

そして、(c)「生徒の声」を聴いたり紡いだりする教育実践を構想・実践する、いわばペダゴジーとしての「生徒の声」研究群が存在し、この研究の系譜は研究代表者がもっとも関心を寄せてきたものであり、本研究課題の問題関心と重なっている。

研究代表者は、このペダゴジーとしての「生徒の声」研究を捉えるにあたって、ヘンリー・ジルのクリティカル・ペダゴジーに依拠した。そのうえで、教室の文脈を念頭に置いたペダゴジーとしての「生徒の声」研究が周縁化されているという問題提起を行った。ペダゴジーとしての「生徒の声」研究は、(a)の研究群が包含する文脈であると捉えられている可能性が高い。それでもなお、ペダゴジーとしての「生徒の声」研究が「生徒の声」研究全体の中で周縁に位置していると研究代表者が主張する根拠には、(もちろん(b)の系譜と同様に自称はしていないまでも)授業実践や学校での日常的な出来事の文脈を対象とした、ペダゴジーとしての「生徒の声」研究が目立った存在感をもたないことがある。「生徒の声」といえば基本的には、学校への生徒参加を促す任意の取り組みや、協働的な学校改善のための研究調査の文脈が対象となっており、日常的な教師と生徒のペダゴジーの実際に迫ったものは、極めて限られた数しか存在しない。

以上の整理をふまえて、当該論文ではこの周縁化されたペダゴジーとしての「生徒の声」研究を、(a)のメインストリームの系譜とは異なる固有の文脈として切り出して照射する必要があると主張した。例えば、(a)の系譜の文献においても、教室で民主主義をモデル化し経験させるカリキュラムやペダゴジー的経験がなければ、民主主義的な構造やプロセスは効果が乏しく、真正性を欠くと主張されている。すなわち、「生徒の声」を重視するということは、学校環境などのメタな構造を整備するだけでは不十分であり、カリキュラムのデザインや実践と合わさって初めて実質的に保障される、いわば両輪の関係であると捉えられている。また、(a)の系譜の「生徒の声」の取り組みの一定数が、拒否権との兼ね合いから任意参加にとどまってしまうことに鑑みれば、授業実践においてすべての生徒の参加を促し、「生徒の声」に向き合うことは、声なき声を聴くうえで欠かせないと考えられる。

(2) 教師が「生徒の声」を聴くことの困難

(1)で示したペダゴジーとしての「生徒の声」研究の枠組みに呼応する形で、(2)の研究課題では米国の多文化教育のペダゴジーに携わる教師の実践記録や語りに着目し、その際に直面する困難を明らかにした。本研究の成果は『教育学研究』に研究論文として掲載された。

(2)の研究課題では、アメリカの中学校教師であるグレゴリー・ミッチー(Gregory Michie)の実践記録とその後の研究の検討を通して、「人種（注：生物学的には否定されている、西欧中心主義に基づく社会的構築物だが、本研究では現存するレイシズムを分析して打破するための枠組みとしてカギカッコ付きで参照している）」を重視する米国の多文化教育のペダゴジーの文脈

で、教師が生徒の声を聴くことの難しさを明らかにした。成果として、次の2つの困難が示された。

第1に、ニーズの想定をめぐる困難である。ミッチーをはじめとする白人教師は、有色人種の子どもたちの教育に関わる際、文化的な違いについての知識が乏しいため、彼らのニーズを想定することが困難であったが、ペダゴジーにおいては「学生の声」をより素朴に聴くことができる場面もあった。一方、有色人種の教師は、子どもたちの期待やニーズを想定しやすいという利点がある一方で、そのために子どもたちの表現するニーズに耳を傾け、知的自由を確保することが困難な場合があることがわかった。

第2に、教育学において学力保障とのバランスをとりながら「生徒の声」に耳を傾けることの難しさである。「生徒の声」を表現しようとする教育実践の多くは時間がかかる傾向にあり、学業達成を重視する有色人種の多文化教育者は、教育内容を網羅するための時間的制約に巻き込まれてしまうことがある。新自由主義的な教育政策の圧力に加え、教師自身の過去の経験から、標準化テストなどの学力向上は軽視できず、自らの意思とは裏腹に生徒の抵抗に遭うことが多い。

そして、この2つの困難の関係は、次のように整理できる。文化の違いから、従来の多文化教育研究では、白人教師が有色人種の生徒の「声」を聞くことは困難であると考えられてきた。また、ポストコロニアリズムのサバルタン論のように、明らかに異質な背景を持つ他者として「生徒の声」を聴くことの難しさもしばしば議論されてきた。本研究では、ミッチーの実践記録とその後の研究の分析を通じて、有色人種の教師は、自分に近い位置にいる生徒のニーズを想定することができ、それが逆に、他者のニーズを想定する際の限界という問題を把握することを困難にしていることが明らかとなった。つまり、本研究では、生徒と文化的背景が重なる教員であっても、重なるがゆえに生徒の声を聞き取ることが困難な場合があることが示された。同時に、文化の違いから、白人教師は有色人種の子どもたちの声をよりオープンに聴くことができる可能性があることも明らかになった。しかし、この文脈は、有色人種教師が直面し、多文化教育のペダゴジーにおいて重視している学力保障との両立という難しい問題を棚上げにしているという点で限界を有することも指摘せざるを得ない。

得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

上記の研究成果について、(1)は「生徒の声」を聴く研究や実践の射程を広く捉えることで、より網羅的に生徒のアイデンティティや実存を尊重する教育のあり方を把握することを可能にしたという意義がある。(2)は、従来の多文化教育などにおいて、異質な他者の声を聴く難しさばかりが強調されてきたことに対し、異質な他者であるから声を聴きやすくなる場面や、重なる背景があるからこそ声を聴くことが難しくなる場面、そして学力保障との両立問題など、多様な困難のあり方を明らかにすることで、「生徒の声」を聴く教育実践の諸相をより複雑なものとして示すことができた。

今後の展望

今後は、米国の多文化教育の中で生徒のアイデンティティを重視した教育実践の試みに引き続き着目したいと考えている。具体的には、本研究のなかで扱った多文化教育と立場の近い、「知識／アイデンティティの宝庫(funds of knowledge/identity)」アプローチに注目している。このアプローチは、人類学者との協働による家庭訪問や、子どもたちが描いた創作物などを手がかりに、生徒たちのアイデンティティに敬意を払い、それと重なるようなカリキュラム開発を目指すものであり、これまで研究代表者が検討してきた教師個人が子どもの「声」を聴く取り組みとはかなり性格を異にしている。これまでの研究と合わせて、多様な子どもたちの声を聴く試みを明らかにしていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 植松千喜	4. 巻 90(1)
2. 論文標題 ペダゴジーにおける「生徒の声」を聴くことの困難 グレゴリー・ミッチーの多文化教育の実践記録および研究を手がかりに	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育学研究	6. 最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 植松千喜	4. 巻 44
2. 論文標題 教育学における「生徒の声」研究の射程 ペダゴジーとしての「生徒の声」研究の再評価	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 明治大学教職課程年報	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 植松千喜	4. 巻 61
2. 論文標題 授業実践における「生徒の声」の可能性と課題 ヘンリー・ジルーと多文化教育を手がかりに	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京大学大学院教育学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 365-373
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------